

白藍塾オリジナル

2013入試小論文分析&解答のヒント

2013年3月発行

白藍塾の入試小論文分析は、他の予備校と違って、その問題に対して受験生がどのようにアプローチすればよいのかを具体的に説明している。そのため、この分析を参考にすれば、誰でも合格レベルの答案を書けるはずだ。該当の大学・学部の志望者は、ぜひ、これを読んで、自分で実際に答案を書いてみてほしい。

執筆・樋口裕一・大原理志・大場秀浩

●東大後期・総合科目Ⅲ

ここ数年、説明問題が多くなっている印象があるが、今年度も、基本的にはどれも説明問題。とはいえ、一定以上の知識がないと的確に答えられないという点で、ハードルの高さはあいかわらずだ。

第一問は、空間概念が歴史上どのように変化してきたかを論じた文章。難しい文章だが、「近代／ポストモダン」について一定の知識があれば、十分読み取れるはずだ。

問一は、空間概念の変化について、転換期を特定した後、その前後の内容を説明するという問題。ほぼ全文要約の問題と考えてよい。転換期については、課題文にはっきりと、「中世までの地図と、大航海時代の地図の間」「ルネッサンス期、あるいは近代の初源の期間」とあるので、それが答え。簡単にまとめると、中世までの空間概念は、アリストテレス的な求心性を持ち、意味付けられた世界を表現している。そこでは、場所によって異なる意味が与えられ、それが人間の行動の規範としての役割を果たしていた。それに対して、ルネッサンス以降の空間概念は、意味から解放され、測定可能な、あらゆる部分が等質な空間である。そこでは、もはや空間はただの容れ物でしかなく、規範としての役割を持たない。そうしたことを、課題文に即して説明すればよい。

構成としては、基本型Aを使って、最初に空間概念の変化を簡潔にまとめた上で、ルネッサンス以前と以後の空間概念の内容を、それぞれ一段落を使ってくわしく説明すればよいだろう。

問二は、課題文で説明されている近代の等質空間が変容し、空間概念が多様化している現状を説明した上で、一九七五年以降、どのような「空間のイメージ」が展開したかを論じるように求められている。「(一九七五年以降の) 社会状況や技術の変化」というのは、普通に考えれば、グローバル化(やそれによるボーダレス化) および情報化のことを指しているのだろう。また、思想の世界では、ポストモダンの考え方が広まり、近代批判が盛んに行われるようになった。そうした背景を踏まえて考える必要がある。

最もイメージしやすいのは、やはり情報化の進展による空間概念の変化だろう。ネット

ワークが瞬時につながるようになって、空間が時間や距離の制約を逃れ、アリストテレス的な求心性どころか、測定可能な距離さえ意味を失ってしまった。そして、インターネット上の仮想空間が、逆に現実の空間に影響を与えるようになってきている。そうした状況を説明するとよい。

課題文を読んだだけでは答えられない問題ではあるが、タイプとしてはこれもやはり説明問題。基本型Aでまとめるのが無難だろう。

第二問は、徳川体制の崩壊から明治維新への流れを、「乱世的革命」と捉え、「攘夷」の理想が裏切られていく過程として論じた文章。

問一は、「幕末から明治維新に至る歴史」の説明が求められている。昨年度のワイマール共和国の歴史などと比べると、はるかにやりやすい問題ではあるが、もちろんただ教科書の知識を並べるだけでは答えにならない。課題文の枠組みに従って、「攘夷」の理想が現実の政治の動きによって裏切られていく過程を説明するのが、うまい答え方だろう。

問二は、筆者が明治維新を「乱世的革命」と捉え、「文字どおりの『攘夷』を信じた人々からすれば、革命は完全に裏切られたと論じる理由」を考察する問題。今ひとつ意図のわかりにくい設問だが、要は課題文が論じている内容を、「明治維新がさまざまな階層に与えた影響に注目しながら」補足して説明し直すことが求められていると考えてよい。その意味では、これも小論文問題ではなく、説明問題。ただし、これもしっかりと答えるためには、課題文をまとめるだけではダメで、それなりの日本史の知識が必要だ。

大ざっぱに、当時の支配階級であった武士階級と、富裕な商人・農民も含めた庶民階級に分けて考えると整理しやすい。革命の主体となったのは、庶民階級ではなく、主に当時の下級武士。もともと、明治維新は武士階級の内部での権力闘争という面が強く、「攘夷」も結果的には現行の政権（徳川政権）への批判の口実として使われることになった。政権を奪取した新政府の指導者たちにとっては、「攘夷」の口実はもはや必要なく、彼らは現実に対応して開国派に転じていった。

一方、庶民階級に明治維新がどんな「影響」を与えたかについては、課題文からはほとんど読み取れない。だが、庶民が西洋人に「友好的だった」という記述からもわかるように、庶民の多くにとっては、「攘夷」か「開国」かというのは、実はどうでもよかった。また、江戸末期には、すでに日本でも商品経済が成熟していたという知識があれば、庶民の多くが望んでいたのは、「攘夷」の理想の実現ではなく、安定した政治体制と経済活動の自由だったことが推測できるはずだ。庶民階級が新体制にそれほど抵抗なく適応していったのは、そのためだろう。

このように、革命にとって「攘夷」が意味を失っていく中で、徳川体制において武士階級が持っていた特権そのものが失われてしまい、純粹に「攘夷」を信じていた一部の武士たちは、時代から取り残されてしまった。それが、彼らが「裏切られた」と感じた原因だと考えられる。

以上のような内容を、字数に合わせて説明すればよい。基本型Bを使って、武士階級と庶民階級のそれぞれについて一段落ずつで説明し、最後に全体をまとめる形にするのが、書きやすいだろう。

このように、東大の問題では、自分の志望分野にとらわれない幅広い知識と教養が求められる。また、設問の意図を的確に読み取って答えることも重要だ。今後も、そうした点にとくに注意して準備をする必要があるだろう。

◎執筆者の許可なく本紙の全部もしくは一部を無断転載、無断複写することを固く禁じます。

発行・白藍塾総合情報室 (03-3369-1179)

<http://www.hakuranjuku.co.jp>